

学童期小児の運動主体感の時間窓

○信迫 悟志¹⁾辻本 多恵子²⁾坂井 理美³⁾古川 恵美¹⁾大住 倫弘¹⁾中井 昭夫⁴⁾前田 貴記⁵⁾森岡 周¹⁾

- 1) 畿央大学 ニューロリハビリテーション研究センター
- 2) 西出医院 リハビリテーション科
- 3) 東大阪山路病院 リハビリテーション科
- 4) 武庫川女子大学 教育研究所
- 5) 慶應義塾大学 医学部精神・神経科学教室

【はじめに】

Sense of Agency (SoA) は、理論的にFeeling of Agency (FoA) と Judgment of Agency (JoA) から構成される (Synofzik et al.,2008) 。 FoAは、感覚-運動機能に基づき (Frith et al.,2000) ， JoAは複雑な認知的手がかりに基づく (Moore & Fletcher,2012) 。 これらの知見は成人のSoAについて調査した研究に基づいており、小児期のSoAは十分に明らかになっていない。そこで小児と成人との間でSoAの時間窓が異なるか否かについて調査した。

【方法】

94名の学童期定型発達児 (小児群: 平均年齢±標準偏差, 9.1歳±1.9) と30名の若年健常成人 (成人群: 平均年齢±標準偏差, 21.5歳±0.6) が本研究に参加した。SoAの時間窓は、SoA課題 (Keio method, Maeda et al.,2012,2013) により測定し、Point of Subjective Equality (PSE, 自己帰属率が50%となる遅延時間) を算出し、SoAの時間窓の定量指標とした。微細運動機能は、Movement Assessment Battery for Children-2nd editionのManual dexterity testを使用し測定した。統計学的に、PSEの群間比較およびPSEと微細運動機能との相関分析を実施し、有意水準は5%とした。

【結果】

両群ともに、SoA課題における遅延時間が増加すると、SoAが減弱した。小児群のPSEは、成人群のPSEと比較して、有意に短縮した ($z=-4.146$, $p<0.001$) 。小児群において、PSEと微細運動機能との間には、有意な相関関係 ($r=-0.324$, $p=0.001$) を認めたが、成人群のPSEと微細運動機能との間には、相関関係を認めなかった ($r=-0.112$, $p=0.556$) 。

【考察】

本研究結果は、小児と成人のSoAが共にFoAの影響を受けるが、小児のSoAは、成人と比較して、FoAの影響をより強く受けていることを示唆した。

【倫理的配慮 (説明と同意)】

本研究は、所属施設の研究倫理委員会で承認された後に、ヘルシンキ宣言に基づき、個人情報の管理には十分配慮して実施した。全ての参加者 (保護者) には、事前に本研究について、文書による説明を行い、署名による同意を得た。